

第173回くらしの植物苑観察会 2013年8月24日(土)

—「朝顔の名前からわかること」—

仁田坂 英二 (九州大学大学院理学研究院生物科学部門 講師)

アサガオの中でも「大輪朝顔」など種子のできる品種群では、その品種が持つ葉形や花色などの変異遺伝子が均一になって固定している(遺伝子がホモ接合になっている)ため、播いた種子のほとんどが同じ色・形のアサガオになり、他の園芸植物と同様に品種名を付けています。

形の変化を楽しむ「変化朝顔」も文化文政期の第1次ブームの頃は種子のできる比較的シンプルなものが多く品種名で呼ばれていました。ところが、その後発達した種子のできない(不稔)変異を持つ変化朝顔では、変異を固定できないため毎世代色々な形のアサガオが分離します。また、同じ株でも花卉の形(芸)は咲いた花によっても異なっているため、株ごとに名前を付ける必要に迫られました。葉と花の性質を順に書き表す命名法(見立て名ともいいますが、ここでは花銘と呼びます)が嘉永安政期には確立し、現在まで用いられています。アサガオの花銘や遺伝子名にも使われている名称は、その変異と似た形の植物、動物、家紋、地名など色々なものにとえています。

1865年にメンデルが遺伝の法則を発表し、それが世に広く知られるようになるのは1900年以降です。江戸時代の人々はそれ以前から、親木を利用して不稔の変化朝顔を栽培していたことから、「日本人はメンデルよりも先に遺伝の法則を知っていた」という記述がしばしば見られます。しかし、そもそも日本人は生物共通の法則性があるということに考えが及んでおらず、受粉の仕組みも知らなかったようです。

メンデル以前の遺伝の考え方は「融合説」と呼ばれる、遺伝現象は絵の具を混ぜるようなもので一度混ぜたものは分離が不可能だという考え方でした。逆にメンデルは分離可能な遺伝因子を仮定し、「粒子説」とも呼ばれる遺伝の法則を唱えました。アサガオの花銘は現在の遺伝学から見ても理にかなっており、江戸期の栽培家は、鑑賞用の出物は基本となる変異がいくつも組み合わせさせてできたものだと考えていたようです。この点に限って言えばメンデルの考え方の一部分に



「青砂摺立田竜葉深川鼠総鳥甲噴上雀牡丹」大阪では車咲(立田+縮緬葉台咲)のことを雀咲と呼んでいた。
大阪朝顔研究会会報2号(大正8-1919)

は到達できていたのかもしれませんが。

江戸期の栽培家がこのような考え方に至ったのは、その鋭い観察眼にもよりますが、他の理由として、すべての事物を基本単位の組み合わせで説明する「陰陽五行説」の影響が考えられます。明治の朝顔会報においても、全てのアサガオは、並・渦・乱菊・桐・獅子の組み合わせで説明できるとする、朝顔五性説の重要性が説かれており、陰陽五行説に影響を受けています。

この観察会では、江戸期に発達していた園芸技術の中でも、種子で殖やす一年草ゆえに特に高度な栽培技術が発達していたアサガオについて、その名前の付け方から迫ってみたいと思います。

.....
次回予告 第174回くらしの植物苑観察会 2013年9月28日(土)

「伝統の朝顔展の裏側」 山村 聡 (当館博物館事業課 主任 くらしの植物苑担当)

13:30~15:00 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要